境界性人格障害についての実存的精神分析
―太宰治を事例として―

田　中　誉　樹

1　問題と目的

周知のように、太宰治は、日本を代表する作家のひとりである。太宰の作品が読者の心を惹きつける要因が何であるかを説明するのは難しい。しかし、敢えてその中の一つを挙げるとすれば、それは、実体験を素材にした男女の愛憎の表現の生々しさにあるように思われる。太宰は、自らの経験を素材にし、それに虚構を織り交ぜた、「私小説」という形式で恋愛や夫婦の物語を描くのが得意であった。自分が実際に経験した出来事や、引き起こした事件（家族、特に母性体験の描写や、幼少年期、青年期の恋愛経験、夫婦生活、不倫、心中未遂事件など）を素材にして、あたかもその作品で描かれていることの全てが実際にあった出来事であるかのように、リアルに創作する才能に長けていた。そのため、作品に記述されている出来事がすべて太宰の実体験であるかのような誤解も起こり、創作と現実の混在した記述を根拠にした「太宰治研究」や「太宰治論」が多く書かれることになった。太宰の親友であり、良き理解者であった山岸外史ですら、『人間太宰治』において、こうした過ちを犯している（山岸 1962）。

太宰治本人はもちろん、近親者や知人友人のほとんどが生存していない現在となっては、彼の人となりや、彼をめぐる様々な出来事を、ありのままに再現・検証することは困難である。

しかし幸いなことに、長篠康一郎、相馬正一、東郷克己など、実証性を重んじた良心的な研究者の業績や、津島美知子夫人、野平一夫など出版関係者、愛人であった山崎富栄の日記、主治医の回想録、太宰自身による書簡などが、太宰の人物像についてのかなり精確な資料を提供してくれていることも事実である。

したがって太宰の人物や心理について研究しようとするならば、まずは、こうした信頼性の高い資料に当たって、太宰の実像を把握すること、そして、作品で描かれている物語の創作

部分とそこに織り込まれている現実の体験とを、可能な限り注意深く区別することによって、本当に起こったことは、何であったのか、そして、その出来事を素材として作品を創作することで太宰が表現しようとしたことは何であったのかということを明らかにすることが必要となる。筆者は、以前にも太宰治を事例として、境界性人格障害の実存構造について、解釈学的現象学を用いた分析を行ったが（田中 2013）、その過程で、太宰がこの病を生きる固有の様態の特徴として、女性との関係、特に母性的役割を担った女性との関係が、彼の生の中で重要な意味を持っていることがわかってきた。それを受けて、本稿では、太宰と女性との関係に注目することで、境界性人格障害という「病」を通して太宰が如何に生きようとしたかを明らかにする必要があると考えた。このことを分析することで、境界性人格障害の一般的特徴とされている「異性関係の放埒さ」「理想化と脱価値化」「自殺のそぶり」（米国精神医学会 2003）などの行動が、それを病む当の個人にとっては、単純に一般化できない、その人固有の意味と経験に基づいた表現形態をとったものであること、そして、一般的な診断概念だけでなく、この「病の意味と経験の固有性」ということを理解することなくして、有効な治療や支援はできないということが明らかになると思われる。

太宰と彼をめぐる女性たちとの関係については―まだ不明な部分も多く残されているが―、上述の研究者による実証的な研究によって、その実情がある程度、明らかになってきている。本稿の目的は、人間太宰治の生きざまの底流となっていた根源的欲望（サルトル 1956）の様相を、特に女性との関係に的を絞って、サルトルの実存的精神分析を用いて明らかにすることである。後述するように、作品は一部の例外を除いて、基本的に資料として用いていない。作品の資料的価値の高さは疑うべくもないが、本稿では、主に実証的な資料をテクストとして用いている。作品は、太宰の心像世界の象徴、メタファー、アナロジーとして解釈的分析を行うならば、太宰の実存構造を知るための貴重な資料となるであろう。しかし、その作業は、別の機会に行う予定であるので、本稿では、『思い出』に出てくる、「叔母の乳房の夢」について触れる程度に留める。

2. 方法

本稿の目的は、太宰治固有の実存的構造を、女性との関係を中心に据えて明らかにすることである。したがって、人間の実存構造（感性の先験的構造、詳細は後述）を明らかにするためにサルトルが提唱した実存的精神分析を方法として用いる。以下、実存的精神分析に

ついて、フロイトの精神分析と比較しながら説明する。

1)汎性欲主義の否定

実存的精神分析は、主著、『存在と無』の中でサルトルが提唱した人間の実存様態を解明するための方法である(サルトル 1956)。サルトルは、フロイトの精神分析を現象学的な立場から批判し、「リビドー」という概念を退けて、「神のごとく完全でありたいという欲望」としての「根源的欲望」こそが、人間の行動を動機付ける「力」であると主張した(サルトル 1956)。根源的欲望とは、人間が、基本的に不完全な存在であり、自己の充実した全体性(神のごとき完全性)の実現を志向しながらも、それが叶わないが故に常に抱き続けるア・プリオリな欲望のことである。精神分析では、リビドー(性のエネルギー)を、人間心理のあらゆる発達過程、欲動、葛藤を基礎づけるものであるとしているが、これは多様な心理的現象(心理的経験)を、「性」のみに還元し、性的でないものにまで性的な性質を賦与することに他ならない。したがって、実存的精神分析では、性を人間の実存を構成する一要素として取り上げはするが、それをすべての人間的経験の基礎であるとは考えない。

2)「無意識」の否定

また実存的精神分析は、「無意識」という概念も否定する。精神分析は、人間の内面に「無意識」という領域があると想定し、その中に性的欲動(リビドー)や過去のトラウマが「入っている」かのようなモデルを作り上げた。しかし、現象学的立場から考えれば、「無意識」という概念は、現在は意識されていない何か、これから意識されるかも知れない何かに名前を付与し、名詞化、実体化したものに過ぎない。そして、この「何か」もそれ自体、「意識」という形でしか顕現されえないような現象なのである。しかるに精神分析は、それに名前を付け、実体化してしまうことによって、意識経験全体の持つ生き生きとした生々しい動的な性質を削ぎ落としてしまったといえる。

人間の経験は、何ものかを意識するところから始まる。世界は、意識されることによって初めて意味を持った生活世界となる。したがって、意識と世界とは、切っても切れない関係にある。意識という現象は、必ず「世界の中の～についての意識」「世界の中の～に向かっての意識」という様態において顕現する。すなわち、意識とは、世界内の何者かに向かっての超越という運動(志向性)そのもののことである。何かが「意識されていない」ということは、「意識が無い(無意識)」ということではなく、それに意識が向かっていないこと、又は、他の何かが

意識の注意を引いているために、あるものが、その意識されている「何か」の背景に退いて、はっきりと意識されていない状態にあるという状態を指している。

「無意識」という概念は、人間心理をわかりやすく理解するための説明概念としては便利であるが、あたかも人間の内面に「無意識」という入れ物のような場所があって、その中に欲動やトラウマという「心的内容物」が入っているかのような誤解を招きやすい。実際には、人間の「心」という現象は、意識という運動から成っているのであり、「無意識」とは、上述したように、「何か」が意識から遠いか、それに意識が向いていない状態に付けられた名称にすぎない。この、意識から遠いか近いか、意識の前景にあるか後景にしりぞいているかということは、ゲシュタルト心理学の「図」と「地」の理論とも一致する実証性を有している。現象学的方法を基本とする実存的精神分析は、「何かについての意識」という、確たる経験的現象から出発する。「無意識」という概念を所与のものとして措定しない。

3)「過去」ではなく「未来」からの人間理解

実存的精神分析においては、行動、言動、作品における行為や表現の選択の意味を未来から現在への復帰として理解する(竹内　1966)。精神分析では、過去の外傷体験が現在において反復・再現されることによって、ヒステリー障害や転移などの現象が起こるという決定論的な考え方をとるが、現象学においては、「過去」は、個人がその中に投げ出されてきた被投的事実の集積であり、これをどのように意味づけるかは、現在のその人自身の自由と責任のもとに行われる「根源的選択」(サルトル　1956)によると考える。また、過去の経験に対する意味づけは、常に未来の目的との関連で行われる。これまで生きてきた事実について、どのような意味を選択するかは、その事実を生きてきた当人が、未来において、どのようになりたいか、どのように生きようとしているかによって変わってくると考えられる。

4)不安は、過去にではなく「自由であること」に由来している。

実存的精神分析は、「私たちは自由の刑に処せられている」(サルトル　1956)という存在論的事実を重視する。実存的精神分析では、人間は本質的に自由であると考える。人間は、精神分析がいうような過去の経験に縛られて生きている受動的存在ではない。常に自分の「存在の仕方」を選びとる自由を有している。ただし、自由は無限ではなく制約つきである。サルトルの言う「自由」とは、「自分の欲したものを獲得する自由」ではなく、「欲すること、選ぶことを自分自身で決定する自由」である(サルトル　1956)。そして選択には必ず成功と

失敗の二つの可能性が付きまとう。そして、いずれの場合にもその結果は自分に帰ってくる。人間は選択の自由を有しているが、その結果についての責任も有している。これは、最近、流行りの「自己責任論」ではない。最近の「自己責任論」は、社会的構造の歪みや政府の政策、企業の経営上の失敗などを隠蔽し、責任の所在が個々の国民や労働者にあるかのように思わせる、上から押し付けられた「自己責任」であり、巧妙な情報操作によって正当化されている政治家や官僚、経営者による責任回避のための論理である。

サルトルの言う自己責任とは、他者から押し付けられて生じるものではなく、人間各自が、どのように生きるかの選択を行う際に、自然に発生する根源的な責任である。

その責任は、理不尽さを伴う場合がある。選択に際して助言してくれた他者や、そのような状況に自分を投げ入れた加害的な他者がいたとしても、その助言を取り入れるかどうか、被害によって受けた損害をどのように処理するかは、最終的にはその個人の責任において選択されなければならない問題となる。特に、人生を左右するような重大な選択においては、選択の結果が不本意なものであっても、それに伴う責任を、他者や状況世界に押し付けて、その不本意な状況から逃れることはできない。自分に直接の責任がないにもかかわらず、もたらされた結果について、自分が後始末を引き受け、どのような決着をつけるかという選択の責任を負わなければならないことが、人間生活にはままある（例えば、遺伝病の受容、事故による身体損傷の受容、親の借金、配偶者の不倫、上司や同僚の失敗の責任を負わされることなど…）。このようにサルトルのいう責任には、理不尽さ、不条理が伴っている。

さらに人間には、何も選択しないという自由は与えられていない。選択に伴う責任を回避することもできない。何も選択しないと言うのは、何も為さず、どのような行動も選ばないということであるが、現実にそのようなことは不可能である。「選択しない」ということ自体が既に一つの選択である。何も選ばなかったことによって招来される結果の責任を、その人は負わなければならない。人間は常に「根源的選択」（サルトル　1956、竹内　1966）の前に立たされており、ア・プリオリに自己の存在についての責任を負っている。

人間存在の選択に関する、以上のような事実－自分が招いた行為・状況はもちろん、そうではないものであっても、その結果についての最終的選択の責任を負わなければならないという事実－をサルトルは「不条理」（サルトル　1956）と呼んだ。自分に原因がない出来事の責任を負わなければならないこと、選択しないという選択肢はないということは一種の不条理である。人間は、自由であるが、その自由には責任と不条理が付きまとっている。人間は、根源的に自由であるが、常に選択の責任をも負っている不条理な存在である。それ故に、人

間は、「自由へと呪われているのであり、自由のなかに投げこまれている」(サルトル 1956)と言えるのである。

精神分析では、神経症的な不安の由来を、無意識の中に抑圧された過去の外傷的な性的経験の記憶に求めるが、実存的精神分析では、不安は、人間が上記のように自由と責任を負った存在であることに由来すると考える。不安は、過去の想起からくるのではなく、未来に向けての選択の自由に伴う責任の重さから、そして自由であるが故の未来の不鮮明さと不条理とからくるのである。

5)防衛機制と自己欺瞞

精神分析でいうところの「自我の防衛機制」を、実存的精神分析は、実存的な「自己欺瞞」(サルトル 1956)と考える。上述のような自由、責任、不安といった実存的な事実を許容できず、自分を適当にごまかすことによって逃避するような状態である。精神分析では、防衛機制の中核に「無意識への抑圧」という概念を措定するが、実存的精神分析では、「無意識」という概念を用いるということは、人間存在に伴う自由、責任、存在が、いずれも意識そのものであるという事実を隠蔽し、「自分でもよくわからないうちに、そうなってしまっていた」という責任回避的な態度へと逃避するための自己欺瞞的な態度を選択することを意味していると考える。

6) 根源的投企と感性の先験的構造

「感性の先験的構造」とは、根源的欲望に根差した世界に対する、その人固有の関係の持ち方、すなわち世界内存在の様式のことである(サルトル 1983、清 2012)。実存的精神分析は、この「感性の先験的構造(世界内存在)」の個別的様式を明らかにするための方法である。上述したように、人間は、常に根源的欲望(神のごとく完全であろうとする欲望)を秘めているが、根源的欲望が充たされることは決してない。したがって人間は常に何らかの形で「存在欠如」の状態にある(サルトル 1956、松浪 1962)。常に欲望している状態、それが人間存在である。「感性の先験的構造(世界内存在)」とは、各人が、それぞれ独自の形で「根源的欲望」の成就を企て、各自固有の「存在欠如」状態(人によって欠如しているものは異なる)の中で、それを埋めるために、各自固有のやり方で世界を感じとり、それと関係している、その感じ取り方、関わり方の全体的構造のことである。実存的精神分析は、この各自固有の「感性の先験的構造」を明らかにするための方法でもある。

3. 太宰治の実存的精神分析

以上、実存的精神分析の方法論的特徴、人間観の特徴について、精神分析と比較しながら、概説した。次に、太宰の「感性の先験的構造（世界内存在）」を、実存的精神分析の観点から分析してみたい。特に、太宰の人生においては女性の果たした役割が非常に大きい。本稿では、太宰にとって「女性」という存在が、どのような意味を持っていたのか、それが太宰自身の生き方の選択に、どのような影響を与えたのかということを明らかにしたい。

そのために、まず、太宰と深く関わりを持った女性達が、どのような人達であったか、そして、太宰は彼女らとどのような関係を持つことを選択したかということを、実証的な文献資料を参考に概観したい。そのうえで、太宰の「感性の先験的構造」がどのようなものであったかを実存的精神分析を用いて分析する。

1）実母タネと乳母

太宰治（本名　津島修治）の実家は、新興地主として財をなし、金貸業も営んでいた。父親（津島源右衛門）は、政治家でもあり、「金木の殿様」と呼ばれていた（相馬　1968）。太宰は、1909年に、その家に十番目の子（男子では六男）として生まれた。太宰の「ア・プリオリな性格」について相馬（1995）は、「父親ゆずり」の面として、「権威に対する生理的な反発」「人並み外れた道化」「金の濫費癖」「人の意表をつくような発想」「虚栄心の強く、周囲からちやほやされていなければ、機嫌が悪くなる」といった性質を、「母たねから受け継いだ」面として、「無気力な自信のなさ」「含羞の優しさ」といった性質をあげている。

また当時、東北地方では、三男坊のことを「オズカス（オジカス＝余計者）」と呼ぶことがあり、このことも太宰の自己像の形成に影響を与えていると考えられる。父親は厳格で、子どもたちと接することがなく、議員としての仕事の関係で、家には不在のことが多かったという。

太宰の母親である**タネ**は病弱でおっとりした、どちらかと言えば軟弱と言って良い性格の持ち主であった。そのため実母であるイシ（太宰の祖母）から「能無し」と呼ばれていたため、上述のような「無気力な自信の無さ」が性格の基調をなしていた（相馬1995）。母乳の出が悪かったため、太宰は産まれてすぐ乳母によって養育された。その後、タネは、仕事柄、東京に滞在することの多かった父親について、東京に住むようになった。太宰の私小説的な作品の中で、実母に詳しく言及したものはほとんどない。また、**「乳母」**についても太宰は、小学校の作文に「僕はをしいかな其の乳母を物心地がついてからは一度も見た時もないし便りもない」と

書いている(全集　1957)。乳母は、太宰が二歳の時に結婚のため津島家を去っている。

2) 叔母きえと越野タケ

乳母が去った後、太宰の養育に当たったのは、実母の妹である**叔母きえ**と、きえの奉公人であった**越野タケ**(当時14歳)であった。

叔母きえは、夫運に恵まれず、最初の夫とは、きえの母親(太宰の祖母)との折り合いが悪かったため離婚となり、4人の娘を連れて太宰の実家に帰ってきた。「勝ち気ではっきりと物を言う性格」(市川　1999)であった。太宰が悪戯をすると、厳しく叱ったが、我が子と同じように可愛がり、寝かしつけもしていた。太宰は、叔母の「出ない乳」をくわえつつ、叔母が語ってくれる昔話をじっと聴いていたという(全集　1957)。太宰は、『思い出』(1933)の中で、「叔母の乳房の夢」(『叔母が私を捨てて家を出ていく夢』)を書いている。

越野タケは、太宰に「道徳」「本を読むこと」を教えた。近所の寺にある地獄絵図を見せて、悪さをしたらどうなるか、話して聞かせた。本を与え、太宰に本を読むことを教えた(市川　1999)。タケは、結婚のため、叔母は結婚した長女の家に同居するため、津島家を出た。タケは太宰が別れを嫌がることがわかっていたので、彼に何も告げずに出て行った。

3) 小山初代と田辺あつみ

1927 年、太宰が 19 歳の時に芥川龍之介が自殺をする。一文学青年として、芥川に深く心酔していた太宰は、大きなショックを受け、勉強が手に付かなくなり、義太夫を習ったり、芸者遊びをしたりと、デカダンな生活にのめり込んでいった。そこで出会ったのが芸妓の**小山初代**(当時 17 歳)である。初代は、小柄で、気立ての良い、人懐っこい性格であった。明るく前向きで、小さなことにこだわらないプラス思考の持ち主で、現代で言う「癒し系」の性格であった(市川 1999)。

1930 年に太宰は、東京帝国大学に入学し、上京する。そして、後を追って出奔してきた初代と実家の反対を押しきって婚約した。津島家は、その婚約を認める代わりに太宰を義絶勘当した。津島家は太宰にとって大きな精神的・経済的依存対象であったため、これは強い衝撃となった(猪瀬　2002)。生活苦と孤独感から太宰は、カフェーで女給をしていた**田辺あつみ**と出会う。田辺あつみは、当時流行っていた断髪姿の、いわゆる「モダンガール」(市川 1999)で、ロマン派や印象派の絵画を好む、教養のある進歩的な女性であった。夫がいて役

者を目指していたが、生活は苦しく、夫との関係は冷え切っていた(市川 1999、猪瀬 2002)。孤独感とわびしさを共有できたためか、太宰とあつみは、親密になり鎌倉の海で薬物を飲み、心中を図る。しかしそれは失敗に終わり、太宰だけが生き残る。自殺幇助罪に問われるが、津島家の計らいによって無罪となった(猪瀬 2002)。初代は、この事件を知って太宰との結婚を躊躇するが、家族の後押しもあり結婚した。当時、太宰は、非合法の共産党活動に関係したり、大学を授業料未納で除籍となったり、就職活動に失敗したり、念願の芥川賞を取り逃したりと、様々な面で行き詰まりを感じていた。そのためパビナールへの依存が強まり、初代や友人知人たちの手によって精神病院に半ば強制的に入院させられる(長篠 1982)。さらに初代は、太宰の知り合いの画学生と「あやまち」を犯してしまう(猪瀬 2002)。それを知った太宰は、大きなショックを受け、お互いの過ちを清算するためといって、初代を伴って水上温泉に向かう。そこで薬物による心中未遂があったとされているが、近年の研究では疑問視されている(長篠 1982)。その後、 1937 年に太宰は初代と離婚する。

4) 津島美知子

太宰の 2 度目の妻となったのは、現在のお茶の水女子大卒の良家の子女であった**石原美知子**である。高学歴の家庭環境に育った美知子は、社会科の教師でもあり、思慮深く、知性と教養を兼ね備えた女性であった。当時の太宰は、『晩年』を発表し芥川賞候補にもなった有名作家であったが、美知子は、太宰の作品をほとんど読んだことがなかった。太宰にまつわる悪い噂については、ある程度聞き知っていたが、『虚構の彷徨』を読んで、その才能に心動かされ、井伏鱒二を介して持ちかけられた太宰との見合い話を受けることにした。太宰が実家から勘当されており、財産もほとんどない状態であることを承知の上で、結婚を決意した(市川 1999)。美知子は、太宰の作品の口述筆記を行うなど、初代とはまた違う意味で、太宰の良き伴侶であった。 1941 年 12 月～ 1945 年 8 月までの太平洋戦争中(太宰は胸部疾患のため徴兵免除)も、戦時下の不自由な生活の中で太宰を支え続けた(津島 1997)。三人の子を産み、太宰を「父親」にした。

5) 太田静子と山崎富栄

太田静子は、開業医の娘で、東京の実践女学校に学び、短歌を学ぶなど、文学の道を志していた女性である。太宰の作品を読んで感銘を受け、 1941 年に太宰を訪ねてくる。静子は、気品のある、子供のようなあどけなさを持った女性であった(市川 1999)。離婚歴があ

り、前の夫との間に女児を設けたが、生後 1 ヶ月足らずで亡くなった。静子は、結婚前にある男性と付き合っていたが、その男性に対する思いを断ち切れなかったことが、我が子を死なせた一因になっているのではないかと言う罪悪感にさいなまれていた。彼女が感銘を受けた太宰の作品とは、『道化の華』であった。『道化の華』は、田辺あつみとの心中事件を素材にした作品であるが、静子は、その作品から、自分と同じく愛する者を死なせたことへの太宰の罪悪感を読み取り、心動かされ、太宰に師事しようと訪れてきたのである(市川 1999)。太宰は、静子に小説よりも日記を書くことを勧めた。 2 人は美知子に気付かれぬよう変名で文通を重ねた。太宰は、静子の日記をもとにして『斜陽』を書き上げた。そして静子との間に娘を設けた。しかしこの時、太宰は山崎富栄(28 歳)とも交際を始めていた。

山崎富栄は、父親譲りの腕のいい美容師であった。アメリカから輸入された新しい技術を身につけて、英語も堪能で意志の強い、明るい女性であった。戦時中も、隣近所から「贅沢は敵だ」などといった誹りを受けながらもずっと理容師としての仕事を続けた。空襲の際には、避難する子ども達をてきぱきと先導し、戦火から守ろうとしていたという(松本 2010)。

戦争が始まる前に、富栄は結婚していたが、その男性がマニラへ転勤となり、そのまま開戦、行方不明となる(のちに戦死と判明)。太宰に出会ってからの富栄は、美容師としての仕事も捨て、家族の意向にも背いて、ひたすら太宰に尽くした。太宰は、美知子と暮らしていた自宅を出て、富栄のアパートで過ごすことが多くなる。活発でテキパキとよく動く富栄を「スタコラサッちゃん」と呼んで可愛がった(猪瀬 2002)。太宰が肺の病気で吐血し苦しんでいる時も、ずっと側にいて看病した。太宰の血のついたチリ紙や下着なども彼女が、大家に見つからないよう処理した。しかし、太田静子の子どもを太宰が認知したこと、いつまでたっても愛人の立場に置かれ、太宰には美知子と言う正妻がいることなどが彼女を苦しめた。当時の太宰は、『人間失格』、『グッドバイ』の執筆、全集の刊行など、仕事の面では充実していた。しかし肺病の苦痛はかなりのものであったという。1948 年 6 月 13 日、太宰治は、山崎富栄と玉川上水に入水した(猪瀬 2002)。

4. 考察

1) 母性的養育者との関係における、太宰の感性の先験的構造

上記の生活史的事実から、太宰には、安定した母性体験が欠如していたことがわかる。大家族の六男に生まれ、「オズカス＝余計者」という立場に、生まれながらに置かれたという

被投的事実は、太宰が自己の存在価値について肯定的な感覚を持つことを困難にした。

それに加えて、人生最初期の母性体験は、心身ともに脆弱で弱い母親と、記憶にも残っていない乳母との関係からなっている。太宰の根源的な母性体験についての「感性」は、希薄さ、非充足感、統合性のなさ、持続性のなさといった感覚によって特徴づけられる。この時期に、既に太宰は、母性体験における根源的存在欠如を経験している。

叔母きえについては、幼少期の太宰が実母ではないかと勘違いし、成人してからタケに再開した時も、何度も自分が実は叔母の子ではないのかとひつこく確認していたということがわかっている(相馬 1974)。また、『思い出』の中に描かれている「叔母の乳房の夢」では、叔母の乳房が「玄関のくぐり戸いっぱいにふさがって」、「もうお前がいやになった」という意味の言葉を吐き、それを聴いた夢の中の太宰がパニックに陥り、泣き叫んでいるという状況が描かれている(『思い出』 1933)。これが、太宰が本当に見た夢なのか、創作されたものなのかは定かでない。しかし、太宰が作品の中で、叔母の像をこのような形で、絶望的で悲痛な感情を伴った体験の対象として造形したことには、深い意味があると思われる。少なくとも、叔母の乳房は、乳は出なくても、強い愛着の対象であったことが推測される。太宰にとって、このように「見捨てる者」として造形された叔母の母性体験は、悪夢のような恐怖感や絶望感を伴う経験であり、太宰の母性や女性に対する基本的な「感性」の構造を形成する重要な要因となったと思われる。

他にも、母性的存在としての叔母の重要性を示唆する事実として、太宰が、叔母の「乳のでない乳房」を咥えながら、叔母が語ってくれる昔話を聞いていたということが挙げられる。叔母は、出ない乳の代わりに「語り」を太宰に与えた。太宰にとって、「語り」を聴くことは、母親の母乳を吸うことに近い、根源的な母性経験に通じるものであったと言える。

きえは、現実には太宰の実母ではなかったが、良くも悪くも太宰の実存的な次元での重要な母親的存在であった。

越野タケは、包容力のある優しい母性の側面を体現する役割を果たしていた。叔母が「昔話」を「授乳」したとすれば、タケは太宰に本を与えるという形で「授乳」した。このようにして太宰の生においては、「語りを聴くこと」「読むこと(語ること)」が、「授乳」という、乳児が生きるために不可欠な母性の享受体験と結びついている。しかし、叔母もタケも、本当の「母乳」を太宰に与えたわけではなかった。やはり太宰には、母親の乳房から直接、母乳を与えられ、精神的・身体的に包容され、充たされるという基本的な母性体験が欠落している。太宰が作家を志したことは、母乳の代わりとしての意味を持つ「言葉」や「語り」を扱う仕事を選択すること

で、このような存在欠如を埋めようという根源的な存在欲望の顕れであったと考えられる。

また、母性的養育者が入れ替わり立ち代わりしたことによって(こうした母性環境のもとに生まれたという被投的事実によって)、太宰の母性体験は、一貫性・持続性のない、不安定なものとなった。さらに叔母を実母であると思い込むといったように、母親像は錯綜したものになっている。母性経験は、「愛されること」と「見捨てられること」、「愛すること」と「見捨てること」、そして「誰が母親かわからない」という両義性、錯綜性を帯び、他者や世界に対する依存的態度と復讐的態度という相反する投企の様式を形成することになった。この存在投企の様式が後年の他者、特に女性に対する関わり方の基本的構え(感性)の持ち方を、否定的な方へと方向付けている。

2) 女性たちとの関係における、太宰の感性の先験的構造

上述のような母性体験における存在欠如と存在欲求は、その後の太宰の女性との関係(恋愛、結婚生活など)に大きな影響を与えた。上述の生活史から、太宰と出会い、関係を持った女性たちは、いずれも、太宰の生の二つの側面、すなわち女性を愛し、依存する「見捨てられた子ども」という側面と、同時に「オズカス」として余計者扱いされ、複数の「母」から見捨てられてきた「冷酷な怒れる子ども」としての側面の間で翻弄されていることがわかる。

実生活における女性関係だけでなく、作品世界の中での女性像も『ヴィヨンの母』の主人公である大谷の妻や、『斜陽』の主人公かず子などに見られるような強くたくましい母性的女性像と『道化の華』をはじめとする心中未遂事件を題材にした作品における、弱く、わびしさを漂わせながら死にゆく母性的女性像として結晶している。

恋愛や夫婦の愛情は、それが男女相互の努力によって育まれ、深められる場合には、両者の生を豊かに、創造的にするものであるが、太宰の場合は、母性的愛情経験が生の根本的な次元で欠如しているが故に、女性との関係は、生の無意味感、空虚感によって気分づけられ、その行き着く先は、関係の破綻か、死という形での破滅へと向かっている。

3) 太宰治における感性の先験的構造

太宰治には、その対人関係や行動様式において、境界性人格障害の一般的特徴が認められることは確かである。しかし、これまで述べてきたように、対人関係や行動の内実を吟味すると、それは以下のような太宰固有の「感性の先験的構造(世界内存在)」を形成していることがわかる。

（1）太宰の存在欠如

存在欠如については、肯定的・継続的、心身統合的母性体験が欠如していたと言える。

（2）根源的欲望と存在投企（世界内存在）

授乳経験と深く結びついていた「物語る＝書く」ことを生涯の職とすることによって、自己の存在価値を取戻したい（愛して認めてほしい）という存在欲望を抱いていた。それは充たされることがない欲望であるが故に、太宰は、常に空虚感と無意味感からくる死への憧憬を抱かざるをえなかった。

また、自己と他者（特に女性）に対しては、関係の破壊（裏切り、心中）という形での破滅的な形での存在投企しか選択できなかった。それは、母性への強い希求と愛してくれない者への怨念（存在欲望）と関係している。心中未遂で死なせた女性を小説の題材にする冷淡さや不倫による妻への裏切りといった「生き方の選択」の仕方に、それが強く影響している。

5. 結論

境界性人格障害の一般的特徴とされている「異性関係の放埒さ」「理想化と脱価値化」「自殺のそぶり」（米国精神医学会 2003）などは、統計的研究から導き出されてきたものであるが、その背景に、単純に一般化できない、その人固有の生の感じ方（感性）と実存的意味、そして表現形態をもっていることを理解することが、治療者の基本的態度として重要である。一般的な診断概念へと個人の体験を還元し、実存する個人を一般的疾患概念の匿名性の中に埋もれさせることは、クライエントに、治療者への不信感、「わかってもらえていない」という気持ちを抱かせることにつながる。病についての普遍的な知識は必要であるが、同じ境界性人格障であっても、太宰治の生きた「境界性人格障害」は、その病の経験の仕方、感性による受け取り方などの存在論的構造において、他の同じ病のクライエントのそれとは異なる、独自で一回的な実存的構造を持っている。これは太宰一人に言えることではなく、他のクライエントの実存的構造も同様であり、それぞれ一回的で独自な感覚と構造を持っている。境界性人格障害という診断は同じでも、その病ゆえに如何に苦しむか、何を失うか、生きていくために何を必要としているかは、人によって異なる。この異なりを念頭に置いて、そのクライエントに合った治療や援助の在り方を模索すること（もちろん、効果があるとわかっている、一般化された治療法を排除するわけではない）の重要性を、心理臨床家は、認識しておくべきである。

病の概念は普遍的でも、病の病み方は、各人各様である。心理臨床家は、一般的、普遍

的な診断概念、疾病概念について、よく知っておくと同時に、他ならぬ「このクライエント」、本稿の内容に即して言うなら、「太宰治」という他と取り替えのきかない独自な個人の実存様態を理解し、太宰が必要としているもの（母性的関係における存在欠如を埋めてくれるもの）を把握し、それを治療関係の中で如何にすれば埋めていくことができるかを模索することが必要とされるのである。

参考文献

安藤　宏、神谷忠孝編『太宰治　全作品研究事典』勉誠社　1995

市川渓二 『太宰治を支えた女性たち』北の街社 1999

猪瀬直樹 『ピカレスク-太宰治伝』小学館 2002

清　眞人 『サルトルの誕生－ニーチェの継承者にして対決者－』藤原書店 2012

サルトル,J,P.『マラルメ論』 渡辺守章、平井啓之訳　中央公論社 1983

サルトル,J,P.『存在と無』松浪信三郎訳　人文書院 1956

志村有弘、渡部芳紀編 『太宰治大事典』勉誠出版　2005

島崎敏樹・福永保郎 「太宰治」『国文学解釈と鑑賞 9 号』至文堂 1958 所収

相馬正一 「子守をした頃の修ちゃ」（相馬正一による、越野タケへの 1974 のインタビュー）、齋藤 愼爾編 『太宰治・坂口安吾―反逆のエチカ』柏書房 1998 所収

相馬正一『若き日の太宰治』筑摩書房 1968

相馬正一 『評伝　太宰治』上下巻、津軽書房 1995

竹内芳郎『サルトル哲学序説』盛田書店 1966

田中誉樹 「境界性パーソナリティー障害の心理的理解と支援についての質的研究－作家太宰治を事例とした解釈学的現象学の立場から－」 京都ノートルダム女子大学学内研究助成制度、研究プロジェクト報告会 2013

津島美知子 『回想の太宰治』人文書院 1997

堤　重久 『太宰治との七年間』筑摩書房 1969

東郷克美 『太宰治の手紙』大修館書店 2009

東郷克美編 『太宰治事典』学燈社 1995

長篠康一郎 『人間太宰治の研究』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 、虎見書房 1966, 1967, 1970

長篠康一郎 『太宰治　七里ヶ浜心中』広論社　1980

長篠康一郎 『太宰治水上心中』広論社 1982

野原一夫 『回想　太宰治』新潮社　1980

米国精神医学会 高橋三郎他訳 『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引』2003

松本 侑子 『恋の蛍: 山崎富栄と太宰治』光文社文庫　2010

松浪 信三郎『実存主義』岩波新書 1962

山崎富栄 『太宰治との愛と死のノート』 学陽書房　1995

山内祥史 『太宰治の年譜』大修館書店　2012

山岸外史 『人間太宰治』筑摩書房　1962

『太宰治全集 12』 筑摩書房 1957

『太宰治全集 12 書簡』筑摩書房　1999

太宰治『ヴィヨンの妻』新潮文庫　1950

太宰治「思い出」1933 年発表(本稿では、『晩年』新潮文庫 2005 所収の版を使用)

太宰治『斜陽』角川文庫　2009

太宰治『晩年』新潮文庫　2005